

に、モデルを設定し、一義的な因子を明らかにすることが重要でありましょう。なお、ここでは熱の出入と熱容量という簡単なモデルをとりましたが、現実の熱の出入には雲という厄介なものが介在して参ります。雲は大気中の水蒸気量および大気の小スケールの運動で定まりますが、これは統計的には大循環にはねかえるはずで、これを議論するにはどうしても統計的な取扱いをしなければなりません。この問題は、大気大循環を論ずる場合のひとつの基礎であり、パラメタリーゼーションのひとつの問題であろうかと思えます。そして、このためには統計気象力学といった種類の研究が必要ではなからうかと思うのであります。

おわりに

以上最近私の考えておりますことを二・三述べてみましたが、終りにいまいしくふれさせて頂きたいことがあ

ります。第2次世界戦争が終ったとき、将来の日本の気象界の前途に思いをはせ、われわれの年代ではどうにもならないのではないだろうかという暗たんたる気持をどうすることもできませんでした。そして、これを取り戻すためには、どうしても若い人たちのエネルギーに頼らなければならない。このためには、若い人たちの教育および研究心を鼓舞することがもっとも重要だと考えました。そして現在をみると、私の考えは間違っていないかと思っている次第です。

しかしながら、当時からすでに20年以上たっており、気象学も新しい革命期に入ってきているように思われます。今後の若い研究者の進出に大いに期待するとともに、日本の気象学会の発展を望んで、私の講演を終らして頂きたいと思えます。

〔新刊紹介〕

「雪華図説覆刻版・小林禎作——雪華図説考」

築地書館刊、土井利位記、小林禎作解説

普及版 980円

科学史の研究は従来とかく学者のサイドワークと言われていたり、年老いた者の仕事のように思われたりしていた。また科学史専門の学者がいたとしても、たとえば論じている一分野においては、その分野の学会でトップレベルの前進的、開拓的研究を発表してはいないという批判もあった。しかし私自身は歴史家には歴史家の見方もあるし使命もあると思っていたが、余りにも専門分野の研究者が歴史に無関心なのを淋しく思っていた。だからこの種の本がその道のトップレベルの研究者より大胆に提出されたことは非常に意義があると思う。又長年の著者の雪結晶に関する研究からにじみ出た実感的強みと、著者らしい綿密さと観察眼が躍如としてあらわれ独特の香りをはなっている。

この著書は雪華図説と続雪華図説の覆刻版をまぎれいに掲げ、その後全体の大半の頁をさいて雪華図説考として著者の解説を載せている。特に初版本と異本、刊行の年代、著述の背景、及び蘭鏡についていねいに解説し、西欧における雪結晶の観察と記録をうまくまとめ、中谷先生もかなりふれたことのある「現代の顕微鏡写真と利位の雪華図との比較」を著者らしいタッチで述

べ、勢い余ってわざわざ利位にゆかりのある古河にまで赴いて、資料をさがした記事をあとがきとして述べている。第一に本の印刷、紙質、デザインがきれいで正に異色である。

ただ少々注文をつけ加えさせていただくと、気象庁の根本順吉氏も指摘されるように、考証としては殆ど満点であるけれども、中国における資料の不足などがあげられる。これは中国語の難かしい文献をあたらなければならないので著者としては避けたのかも知れないが、鎖国中の日本にも中国科学の影響はかなりあったようである。また私も実のところケプラーあたりより歴史哲学的にこの雪結晶の問題を扱ってみようかと2~3論文をあたり出した折であるので、もし著者がなおもこの種の研究を進められるならケプラーあたりの文献を綿密に当たって、特に、当時まだまだはなやかだったギリシャ時代の新プラトン主義の影響に関する事情あたりより説きおこしたら、(これは又一冊の本になるかも知れないが)、歴史も大変ダイナミックになり、科学思想史的な味も出てくるようになるかも知れない。

何れにしても足で文献をかきまわり、頭で考えたものであるのに加えて、手によってきれいな写真を多く掲載しているので、興味あること正に絶大であると感じる。

(気象研究所 内田 英治)